

半沢直樹が職を奪われないために

IPA顧問 松田 晃一

アルファ碁の衝撃

人工知能に関する話題がメディアに盛んに登場するようになった。専門誌ならばともかく、一般向けメディアでも解説や特集が組まれようになったのは、AIソフトのアルファ碁がトッププロの棋士に圧勝したインパクトが大きかったためだろう。

AIは人智を超えるのか？ AIの暴走は大丈夫なのか？ 人間の仕事が奪われるのではないかなどなど話題は尽きない。AIが小説を書く、AIが作曲をする、AIが絵を描く... など、人間固有と思われている創造的な活動にまでAIがトライする世の中になってくると、本当に人智を超えてしまうのか、と考えてしまう。しかし、その可能性があるとしても大分先のことだろうから気楽だが、人間の仕事を奪うとなると、急に現実味を帯びた身近な話題となる。

AIは仕事を奪うか？

英国オックスフォード大学の研究者が発表した「雇用の未来：私たちの仕事はどこまでコンピュータに奪われるか？」という論文では、今後10年～20年の間に米国の雇用の47%が、コンピュータやロボットに職を奪われる可能性が高いとの研究結果を示し話題になっている。日本でも、野村総合研究所が同じ英国の研究者と共同で、日本を対象にした同様の研究を行い、それによれば日本の労働人口の約49%が就いている職業が代替可能との結果が得られたことを発表している。

通信販売受付係、データ入力オペレーター、金融機関窓口係、小売店のレジ係などが仕事を奪われそのような職種として並んでいる。これらは既にコンピュータに代替される兆しが見えていてあまり違和感はない。しかし、前述のオックスフォード大学の論文では、銀行の融資係、ローンオフィサーがAIに職を奪われる上位5位以内に挙がっている。

半沢直樹は仕事を失うか？

池井戸潤の人気小説の主人公、半沢直樹は融資課

長ローンオフィサーだが、彼は仕事を失うのだろうか？ 銀行の融資係、なかでも地域に密着した金融機関の銀行マンは、融資先の経営者の会社経営に対する熱い想いと志に共感して、共に会社を育てるつもりで融資を決めるのだということを聞いたことがある。単に会社の経営指標の数字データだけでは会社の将来は見えてこない、経営者の人となりに投資をするのだ、と。このような仕事のあり方であれば、たぶんAIにとって替わられることはない人間にしかできない仕事であろう。

そういえば、近頃の医師の中には、患者の顔を全く見ずに、パソコンだけに向かって診察する医師が増えていると聞く。もし、そうだとすればこのような医師はAIにとって替わられてしまうのかも知れない。先ほどの論文では、医師は奪われる確率の最も低い職種の一つとされてはいるのだが…。

働き方への問い掛け

このように考えてくると、我々はAIに仕事を奪われることを心配してあたふたするのではなく、本当に人間にしかできない仕事のやり方をしているのか、といった仕事に対する向き合い方を問い掛けてみる必要があるように思う。AIにできることはAIに任せ、その力を借りながら本当に人間にしかできないこと、人間がやるべきことを人間がやる、という本来の働き方を取り戻していくべきだろう。

「ロボットは東大に入れるか」プロジェクトが進められている。AI技術の限界を見極め、それを克服し発展させるためのチャレンジであるが、もしプロジェクトが成功してロボットが東大に入学できたとしたら、そのときはAI技術の成果の達成を喜ぶというよりも、むしろ大学入試のあり方に対して大きな課題が突き付けられたと考えるべきだと思う。AIが合格してしまうような大学入試は、学生の資質や将来の可能性を見極める方法として果たして相応しいのかが問われるべきだと思うが如何だろうか？